

しがだい

—滋賀大学広報誌—
第8号 平成13年7月

新学長就任!! 特集 地域と大学

大学における取組み
各センターの活動
地域からの提言

連載 大学探検

大学の近くを歩いてみよう



彦根キャンパス（本部・経済学部）



大津キャンパス（教育学部）



附属小・中・幼稚園（大津市膳所）



附属養護学校（大津市際川）

【表紙解説】

琵琶湖の西につらなる比良山系は、花崗岩からなる急峻な山塊をもちながら、京阪神から適当な距離にあり、登山・ハイキングや冬季のスキーなど、日帰りのレジャー圏として人気がある。山系の南端にある蓬莱山（標高1174m）は、山頂近くまで行くゴンドラがあり、山頂からの眺望を簡単に楽しめる。湖面からの上昇気流は、パラグライダーにも向いており、こうして飛翔に挑む人もある。写真の正面は琵琶湖大橋。

（滋賀県商工観光政策課所蔵のフォトコンテストの入選作）

新学長就任!!

平成13年7月17日就任

就任にあたって

学長 宮本憲一

このたび伝統のある滋賀大学の学長に推薦され就任することになり光栄に思っています。

いま国立大学は歴史上かつてなかった改革の時期に直面しています。この困難な時期に任に耐えるかどうか心配ですが、大学教職員や学生の内発的な改革の力を信頼して進んでいきたいと思っています。行政改革の波のなかではこれまでの規模拡大の計画は困難になると思います。



プロフィール

宮本 憲一（みやもと けんいち）

1930年2月19日生
名古屋大学経済学部（旧制）卒
経済学博士（京都大学）1972年
専門分野：財政学、環境経済学、都市経済論、
地域経済論、公共政策論

主な職歴：

- 1953年4月 金沢大学法文学部助手
- 1955年4月 同大学講師
- 1960年3月 同大学助教授
- 1965年4月 大阪市立大学商学部助教授
- 1972年10月 同大学教授
- 1986年4月 同大学都市問題資料センター所長
（1988年3月まで）
- 1991年4月 同大学商学部長
（1992年3月まで）
- 1993年4月 同大学名誉教授
- 1993年4月 立命館大学産業社会学部教授
- 1994年4月 同大学政策科学部教授
- 1997年4月 同大学政策科学研究科長
（1998年3月まで）
- 1997年7月 日本学術会議会員（第3部会）
（2000年7月まで）

主な著書：

- 1967年 『社会資本論』有斐閣
（1976年改訂版、1997年復刻版）
- 1973年 『地域開発はこれでよいか』岩波書店
- 1980年 『都市経済論』筑摩書房
- 1983年 『経済大国』小学館
- 1989年 『環境経済学』岩波書店
- 1999年 『都市政策の思想と現実』有斐閣
- 2000年 『日本社会の可能性』岩波書店

など

私のモットーは E. F. Schumacher

の提唱した Small is Beautiful です。規模は小さくても教育・研究の質の高い excellent な大学をめざしたいと考えています。この質の点では滋賀大学は七〇人をこえる博士号を所有する優れた研究者を持ち、今後の大学院重点の改革に対応できる一流の実力をもち、また密度の高い少人数教育によって、国際的に活躍しうる人材を育てうる教育基盤を持っていると思います。この潜在的实力を改革の中に生かしていくことが私の任務だと思っています。

滋賀県は国際的にも認められた環境保全・創造県であり、環境の世紀にふさわしい未来のある地域です。大学はこの地域の特性をいかして環境政策に貢献する研究・教育を発展する使命を持っていると思います。この点では県内の大学はもとより、自治体、経済界や住民組織とも交流して、地域に根ざしながら、国際的にも国内的にも特色をもった大学の発展をめざしたいと思います。教職員・学生の皆様のご支持をお願いいたします。

貢献」を掲げている。大学は教育と研究の成果を地域に発信するばかりにフィードバックしてゆくものである。大学と地域の関係は、決してから地域に働きかけ、大学側の姿勢を示す必要がある。本学では、教り組みを行っていると同時に、附属図書館をはじめとする附属施設、取り組みが、いったい地域の人々にどの程度受け入れられているのか、は滋賀大学をどのようにみているのか、そのあたりを振り返ってみるらの取り組みのひとつであるとみてほしい。

教育学部の「教育」は、学校教育という狭い意味に限るものではなく、社会教育、生涯学習など、地域社会における広い意味での「教育」にもかかわっている。とくに教育実践総合センターは、この広い「教育」についての企画から実践まで、さまざまな事業をすすめる組織として、きわめて有効に機能している。ここでは昨年度、実施した事業を中心にそれらを紹介してみよう。

一、学校教員など教育者を対象とした教育・研究活動

学校教育現場は、多くの課題に直面している。これらの問題に対応するために、教員に研修を実施すると共に、教育課題についての共同研究を組織している。

滋賀県教育委員会から依頼を受けて現職教員を対象に認定講習を実施した。教育学部の教官約二〇名が関わり、延べ五〇〇名余りの受講生があった。教育実践総合センターが中心となって、情報教育、総合学習について、講習会・研究会を行った。

二、学校の児童・生徒を対象とした教育活動

大学の施設、設備等を開放し、子供達に学校教育とは異なる観点から自然科学や人文・社会科学の素晴らしさに

教育学部の取り組み

触れる機会を提供している。また学校教育への不適応を起している子供達に専門的立場から教育相談を実施し、学校教育を補完することなどをめざしている。

フレンドシップ事業

教育実践総合センターを中心に、学部教官が参画して「子どもふれあい教室」「子どもチャレンジ教室」を行っている。学生がふれあい講座を企画運営し、教官が助言、援助を行う形で実施し、平成十二年度は延べ九六二名の参加者があった。

大学等地域開放特別事業等

平成十二年度は理科や技術の教官が中心になり、「滋賀大学で科学しよう」「ソーラーポートを作ろう」というテーマで、小・中学生を教育学部に集めて、観察、実験、工作に親しむ機会を提供した。子供達の環境、生命現象についての関心を高めた。

また大津市科学館で行われた「青少年のための科学の祭典」には教官、学生、大学院生が多数参加し、小中学生を対象にいろいろの実験を行い、七、三〇〇名の参加者を得た。

教育相談

教育実践総合センターが中心となつて、問題を抱える子ども、親、教師の教育相談を行っている。また、不登校児や青年期LD（学習障害）の遊戯療法的な試みとして、大学院生と教官が中心になって、フリースペースをそれぞれ月一回実施している。

三、一般社会人を対象とした教育活動
公開講座等を通して大学の中に蓄積されている知的財産を社会に対して還元する。さらに、地域の社会人を研究生・科目等履修生として受け入れ、授業を公開することなどにより、知的要求を満たすことをめざしている。

生涯学習教育研究センターが中心となつて公開講座を行っているが、教育学部の教官もこれに協力して、平成十二年度は九講座（公開授業を含む）開講した。

四、環境教育湖沼実習センター等の活動

教育実践総合センターによる活動については、右に比較的詳しく述べたが、教育学部附属センターとしては、環境教育湖沼実習センターもあり、地域との結びつきという点からは、きわめて活発な活動を行っている。これについては、後に詳しく紹介してあるのでここでは触れない。また附属学校を通じての活動も、教育学部としては重要な意味をもつことも最後に述べておきたい。

滋賀大学では、大学の理念の一つの目標として「地域への積極的なりでなく、地域との提携・交流の中から得たホットな情報・知識を大で一方通行ではなく、相互に働きかけなければならないが、まず大学育・経済学部がそれぞれの地域的特性や伝統を生かし、さまざまな取研究所でも積極的に地域との連携をはかっている。しかしそのようなあるいは大学は地域のニーズに本当にこたえているのか、地域の人々必要もあるだろう。今回の「地域と大学」と題する特集も、大学側か

戦後の一府県一国立大学制のもとで、国立大学は、一方では大学教育の地域的な機会均等をはかるとともに、他方では地域社会のニーズに就いて教育研究面で地域の発展に寄与するといふ使命をになつてきた。経済学部も、立地している滋賀県を中心に、近畿・中部・北陸の広域的な地域を視野に入れて、大学と地域の結びつきを強める努力を続けてきた。

一、勤労学生に対する就学機会の提供

経済短期大学部を併設して三十年間にわたり勤労学生のための夜間教育を実施した。平成三丁五年度に学部改組・短期大学部の統廃合を行い、高

齢化社会の到来と生涯学習ニーズの高まりに対応するため、社会に開かれた入試・教育制度への改革に着手した。一つは夜間主コースの設置、もう一つは大学院修士課程の入試に「一般社会人」「熟年社会人」「(事業所)派遣社会人」という三つの範疇を設けて、社会人を広く受け入れる体制を整えた。夜間主コースや大学院の社会人選抜制度は、有職者や企業人、家庭主婦など地域社会のさまざまな人々に本格的な修学の機会を提供することを目的としている。

二、生涯学習ニーズに応えた社会人への教育サービスの提供

科目等履修生制度や公開講座、正規の授業の公開は、特定の専門的な知識の修得を希望する社会人向けであり、大学の知的資源を地域社会に有効に活用してもらう取り組みである。平成十二年度は、公開講座が三講座開かれ、正規の授業は五科目公開された。

三、オープン・キャンパス・模擬講義

大学見学会では、以前は志願者の大学の下の性格が強かったが、最近では高校生に大学の教育環境を体験させるオープン・キャンパスの性格が強まっている。高等学校の校外学習として、大学の施設見学、大学で何を学べるか、どのような講義が行われているかなどを説明することによって、高

生の進路決定の支援を行う場となっている。高等学校の依頼で、進路指導を兼ねて模擬講義に出かける機会も増えつつある。平成十二年度は、四月の大阪府立三島高校をかわきりに、本年三

経済学部の取り組み

月までのあいだに滋賀県内五校、岐阜県内一校、兵庫県内一校の計八校に教官を派遣した。

四、地方行政への参画

教官が研究者、教育者として自分の専門的知見を地域社会に還元する機会として、審議会、委員会などを通ずる地方行政への参画がある。平成十三年一月現在で、県の教育委員会、産業教育審議会、固定資産評価審議会、国土利用計画地方審議会、新行政システム推進委員会、職業能力開発審議会、高齢化対策審議会、産業振興委員会、地方労働委員会、AKINDO委員会などの委員をはじめ、大津市や彦根市、近江八幡市、八日市市などから委員を委嘱されている。

経済学部には、現在附属史料館と経済経営研究所の二つの附属施設がある。附属史料館は、昭和二十七年に「博物館相当施設」の指定を受けているが、今日、博物館は、生涯教育の場として教育機能面の重視もなされており、地域に開かれたユニバーシティ・ミュージアムが課題になっているため、今後、いつその整備をめざす考えである。経済経営研究所も、各種研究会や講演会によって地域への貢献を拡大しようとしている。

産業共同研究センター

去る五月三十日(水)、経済学部講堂で産業共同研究センターの開設記念式典が行われた。文部科学省研究振興局長 遠藤昭雄 氏からの来賓祝辞などをいただき、本学経済学部の北村裕明教授が「地域振興と大学の役割」とのテーマで記念講演を行った。これで名実ともにセンターが新たな一歩を踏み出したといえる。

平成十三年度には、三件の民間企業との共同研究が始まっている。まず、株式会社たねやとの間で「近江国内商業史の研究」を平成十二年度に引き続き行っている。同社についての説明は不要であろう。日本全国に展開する有名かつ急成長中の和菓子メーカーである。滋賀大学に蓄積された近江商人研究の伝統と書籍類、これらが現代の企業経営の中核で活かされている。経済学部の宇佐美英機教授が大学側の研究を担当する。

第二の案件として、ティーエムエル株式会社との間で「社会システムとしてのデポジット制ローカルデポジットの経済について」の共同研究を行う。大学側の研究担当者は、経済学



記念式典で挨拶する大村センター長

部の森島寿助教授である。同社は、環境問題に積極的に取り組む地元企業で、従来から森助教授のもとで研究指導を受けてきた。

最後に、株式会社フットテクノと「嗅覚刺激が人体に及ぼす生理・心理的影響に関する研究」を行う。これは、教育学部の豊田一成教授が担当する。同社は、靴の素材開発では世界の先端を走り、欧米の有名メーカーへも独自製品を供給しているとのことである。

また、平成十三年度からは経営相談窓口を開く。毎週水曜日を中心に、新事業の立ち上げや起業に関する相談などを受けたいくことにな

る。同時に、インターネットのポータルサイトである「滋賀ベンチャーズ・インフラ21」でも相談を受け付ける。社会科学系専門家とともに様々な経営上の問題解決にあたっていく。関心のある方は、次のアドレスを訪問してほしい(滋賀大学のホームページから入れる)。

<http://sv121.biwako.shiga-u.ac.jp>

情報処理センター

国立大学の独立行政法人化をふまえ、大学の地域貢献が要請されている。また情報化社会の急速な進展により、国民諸階層のIT関連能力の育成が必要とされる中、この分野で人的・物的条件に恵まれている本センターが積極的に貢献していくことは、大学の地域に対する一つの義務といえよう。これまでの地域貢献は、要請をうける形で進められてきたが、これからの地域貢献は、センターの物的、人的資源を生かして、センター自らが企画し、地域社会に働きかける必要がある。

「情報教育リーダー養成講座」は、センターが滋賀県教育委員会と共催して実施した、そのような地域貢献の例である。滋賀県の各地域から選ばれた小中高の先生達を対象にして、センターで講習会を開催したり、あるいは講師を派遣して協力している。より高い情報技術を持つ高校の先生方に対して、「ネットワーク論」の講習もセンターで行っている。養成講座をきっかけにして、滋賀県教育委員会と意思の疎通がはかられ、センターの活動を理解していただいた。

今年度も、講師派遣や、講習会の開催が各一件決定しているが、さらに増える見込みである。県教育委員会から

は、情報教育に関して、小中高のかかえるいくつかの深刻な問題の解決について、センターの援助を求められている。例えば機器を導入したが、サーバーを管理できる先生がいないので、指導して欲しい等。

本年度は、政府が主催する、一般市民を対象にした「IT技能講習会」をセンターで実施する予定。講習会の講師を、滋賀大学の学生、院生が務める予定である。これらの講師陣に対して、「ITリーダー・ITボランティア養成講座」を受講してもらい、高度な技術を習得したあとに、情報教育の中核を担う人材として活躍してもらうことを期待している。具体的には、彼らの中から選抜して、大学の内外で、情報教育のボランティアとして貢献してもらおうというものである。



生涯学習教育研究センター

大学と地域とのかかわりでは、センターは次の二つの課題を追求してきた。

一、教育・研究成果を地域へ還元すること。

二、地域を基盤とした住民のための学習機会を整備・拡充すること。

具体的には、第一に、公開講座を工夫したことである。大学が近くにない地域へ出かけて行って開講する「地域巡回講座」を企画し、これまでに高月町、五ヶ荘町、新旭町、湖北町で実施した。地域の要求をふまえたテーマを設定するなど、住民には好評である。

また、平成九年度から、大学の正規



の授業の一部を公開する「公開授業」を実施している。多様な授業科目の中から、毎年異なった授業を公開し、学生と共に学んでもらおうという趣旨である。この「公開授業」は、国立大学としては滋賀大学が最初に実施している。

第二は、「淡海生涯力レッジ」の実施である。これは、大学と地域の教育機関（公民館・高校・生涯学習センター）が連携しながら、ステップアップ方式（「問題発見講座」↓「実験・実習講座」↓「理論学習講座」）で体系的な学習を保障しようというシステムである。

このシステムは、生涯学習教育研究センターと滋賀県教育委員会が共同で開発したもので、平成八年度から開始され、現在では五地区（大津市、長浜市、彦根市、八日市市、草津市）で開講されている。

これ以外にも、滋賀県教育委員会とは毎年共催でフォーラム「生涯学習の現代的課題」を実施し、大津市教育委員会とは毎年共催で「生涯学習を考える市民の集い」を開催している。また、平成十年度から長浜市教育委員会と共同で、新たな生涯学習機会の開発のための基礎研究に取り組んでいる。

環境教育湖沼実習センター

本センターは、平成七年に設立されて以来、これからの環境教育を担っていく実践力のある指導者を養成することを第一の目的として、大学の内外で様々な活動を行ってきた。地球規模の環境問題から身近な地域環境にいたるまで、総合的・学際的に環境教育研究を進め、その成果を広く発信している。

二隻の調査艇や附属自然教育研究農場・研究林を有効に活用し、琵琶湖およびその集水域をフィールドにした実践的な活動が大きな特色である。環境教育を研究する学部生・大学院生の指導、現職教員の環境教育



研修に加えて、地域と連携した多様な環境教育の取り組みを展開している。

たとえば、センターでは設立当初より客員研究員制度を導入しており、学校や市民の参加による「湖沼環境しがプロジェクト」を組織し、事業を推進している。すでに五年に及ぶ実績を持つこのプロジェクトでは、毎年小中学生や市民百人以上の参加を得ており、その成果は「みんなでつくろう水環境

マップ」として地域の環境教育教材に広く還元されている。

また、滋賀県、大津市、草津市教育委員会などと連携して、環境に関する公開講座「淡海生涯力レッジ」を毎年開催しており、地域の学習機会の充実に力を入れている。

近年特に要請が多いのが、「総合的な学習の時間」の創設と関わる地域の小中学校の環境学習支援である。センターでは調査艇によるびわ湖体験学習、附属研究農場での栽培教室をはじめ、児童・生徒のための環境学習講座を行っており、年間多くの小中学生がセンターを訪れている。また学校をはじめとして、地域の環境学習を手伝うために出かけていく機会も増えている。

JICAの要請を受けて、海外の環境教育指導者の養成にも昨年から取り組んでいる。

センターでは今後とも、市民参加型プロジェクトをはじめ、地域の体験学習の場としての機能をさらに充実させ、地域・学校と連携した環境教育活動に取り組んでいきたいと考えている。

地域から大学はどう見えているのか、今回は県下の各界の方々からご意見をうかがいました。まず琵琶湖ホルルの副館長として活躍の上原恵美氏にインタビューさせていただきました。

滋賀大学は、どんなイメージで見られているでしょうか。

上原 経済学部・教育学部それぞれに、これまで各界で活躍されている人材を育成されてきたことはよく知られていますし、私の仕事の範囲でも、滋賀大学の先生方には、様々な面でご尽力をいただいています。このように、各分野で個別的に地域に貢献いただいていることは多いと思います。大学が全体として地域に対してどういう方針をもっているのか、地域とどうかかわっているかという点については、あまり知られていないのではないのでしょうか。

教育学部と経済学部が別々のキャンパスにあるので、まとまった滋賀大学というイメージがつかりにくいことも要因のひとつかもしれません。最近、新しく滋賀県下にできた大学が、はつきりした特徴のある学部をもっていたり、アピールが上手であったりして、わかりやすいのに対し、滋賀大学のイメージは、相対的にわかりにくいといえましょう。



琵琶湖ホール副館長
上原恵美氏

では、大学は地域に対して何をアピールすればよいのでしょうか。上原 先

生方のアカデミックな研究や専門分野については、それぞれアピールする場をおもちでしょうし、それについては私たちも仕事に関係したところで承知させていただいています。ただ新しく何かご協力をお願いしたいと思った場合、大学のどこにどのようなお話すればよいかわからないのです。その点で、そういう役割も含めて大学の広報、PRということが非常に大切なのではないのでしょうか。大学から地域に向かつて情報を発信するということが大切なのはいうまでもありませんが、それは、地域が、あるいは地域住民が大学にどのようなニーズをもっているかをきちんと把握することから始まるのではないのでしょうか。一般的にいうと、国立大学は、そういう取り組みにもう少し力を注ぐ必要があると考えます。

文化界から

琵琶湖ホール副館長 上原恵美氏

滋賀大学では、これまで公開講座を実施したり、社会人入学をすすめるなど、一定の取組をしています。これらについてはどうでしょうか。

上原 それらの取組は、もちろん意義のあることだと思います。今後も継続しておこなわれることが大事だと思います。ただ、開かれた大学という場合、地域の人々を大学に招き入れるだけではなく、大学が地域に出てゆく、大学が地域から学び取るという姿勢も必要なのではないかということです。大学の開放とは、大学側が地域社会の人々に一方通行的に来てほしいと呼びかけるだけではなく、大学が社会の側からの働きかけに応える場を作ることでもあると思います。

たとえば滋賀県下には、このびわ湖ホールも含め、博物館、美術館、図書館など、さまざまな公共の文化施設があります。規模や内容の充実度からみて



劇場探検ツアー
(平成11年度びわ湖ホール年報から)

も、全国、あるいは場合によっては世界に十分アピールできるものをもっています。そういう施設を大学の教育の中でもっと生かしていただくことができるのではないのでしょうか。教育学部を出て教員になるような人なら、学校現場の実習だけではなく、こういった地域の様々な資源をどういうように活用するのか、学んでおくことも大切だと思います。またそれぞれの施設では、日常の事業や企画に、外部の方のボランティア活動を取り入れる場を設けています。大学生もそれぞれの専門性を生かしながら、積極的にこのような場に参加することで、大学ではできない経験を積むことができます。たとえばこのびわ湖ホールでは、オペラ、音楽、演劇などの公演だけでなくワークショップなど、これまでの劇場やコンサートホールでは体験できないいろいろな場を設けています。また通常のプログラムでも学生には特典を設けて入りやすくしています。そういうものをどんどん利用してほしいし、それが大学教育とうまく結びついていくことを切に願っています。(インタビュー記事を編集委員がまとめたものです。)



ISO14001の認証授与式にて。

[2000年3月24日、JQA本部(東京)]

筆者は1番左、左から3番目は高田統一滋賀銀行頭取。

滋賀大学では、長年にわたり産業界に優秀な人材を輩出してきました。地元の代表的な企業の一つである、滋賀銀行においても多くのOBが活躍しています。そして、今年度より経済学部が新設されたのを機に、滋賀銀行から「社会人の再教育、高度専門職業人養成」を目的とする「研究の場」に派遣されることになった堀川伊則氏にその意欲を語っていただきました。

私は、この二年間で、デリバティブやリスク管理など金融工学の最先端の理論を研究し、理論と実務を融合し、今後の仕事に活かしていきたいと考えています。また、実務先行の銀行現場と大学という研究現場の「橋渡し」を務め、この面での「産・学共創」も実現したいとの「大それた希望」も抱いています。

また、さて、大学や産業界の交流の一つとして、滋賀銀行では、「産・官・学・金(金融)」の連携をキーワードに、起業を考えている方をサポートする「サタデー起業塾」を開催し、学生の方にも参加いただいています。最近、学生の起業も多くなってきましたが、ぜひとも多くの滋賀大生の方にもご参加いただき、地元発のニュービジネスに挑戦し、第二、第三のソニー、松下を目指してほしいと思います。そして大学としても、こういった活動のサポート体制を構築してほしいと思います。

産業界から

滋賀銀行勤務 堀川伊則氏
(大学院経済学研究科グローバル
ファイナンス専攻 一回生)

滋賀大学では、産業共同研究センターが省令施設に昇格したこともあり、中小企業やベンチャー企業に対する経営指導などをはじめとする、特に社会科学分野での共同テーマに取り組みされるとお聞きし、大学と企業による「相乗効果」で地域経済が一層発展することを期待しています。そのためにも、会社帰りの様々な職業の人が参加できるような、多くの意見が交流できる、より便利でオープンなサロンの場所を作ることも大切だと思います。そして、各種セミナーについても、一般の人が参加しやすいような大学以外の場所での開催も行ってほしいと思います。

さらに、地域社会に対しても、環境熱心県・滋賀の大学として、環境問題についても、企業に多角的

なアドバイスができるよう、取り組みを強化してほしいと思います。滋賀県は、環境ビジネスメッセが開催されるなど、環境ビジネスが盛んなところであるとともに、昨年のG8環境サミットの開催や、今年の十一月には世界湖沼会議が開かれるなど、環境問題への取り組みに注目が集まっている地域です。そして、環境管理の国際規格である「ISO14001」の取得率が全国で最も高く、滋賀県庁をはじめとして次々と取得しており、環境問題に対する意識がとてもしっかりと高まっています(滋賀銀行でも昨年三月に認証を取得しました)。さらに、国立大学でも「ISO14001」を取得する例が出てきており、滋賀大学でもぜひとも挑戦してほしいと思います。

「産」と「学」の融合は歴史の流れです。研究は社会に還元してはじめて価値を持ちます。今後とも、近江商人の「実学」をバックボーンに、地域経済に貢献する優秀な人材の育成に力を入れてほしいと思います。



筆者 堀川伊則氏

私たちはいまだのようでしたら教育学部に元気のいい学生が入ってくるようになるかを考える研究会（通称「入り口研究会」）を作り、いろいろな試みをしています。その一環として、三月末の土曜日に、地元の色々な方々に集まってもらい、座談会を催しました。

いったい滋賀大は地域の人たちからどのように見られているのか、滋賀大を元気のよい大学にするために、地域の側から何かいいアイデアはないのか、と考えたからです。

出席者は、石山公民館の宇部さんと北出さん、晴嵐学区で様々な役職をされている駒村さん、石山でリサイクルの作業所を主宰されている清水さん、平津にお住いでねっこ作業所を主宰されている長田さん、北大路にお住いで自然堂を主宰されている田附さん、石山学区の子ども教室などに参加されている青村さん、そして、大学側からは本学の入り口研究会のメンバー（山崎・秋山・堀越・藤田）、生協の理事の山下さんの十二名でした。

以下に座談会の席でのきびしい意見や要望をいくつか取り上げます。

石山・晴嵐学区に住む私達でさえ、近くの滋賀大よりも、文化ゾーンの龍谷大や立命館大の方が接点がある。大学の規模の違いや私学の営業努力によるのかもかもしれないが、滋賀大からはほとんど何も伝わってこない。

一部の先生が、専



門分野の立場から地域で活動されているようだが、大学として組織されておらず、バラバラで個人の領域に留まっている。講演等たまに出てもらっても、堅いアカデミックな話になりがちで、もう少し市民への歩み寄りが欲しい。

他府県出身者の学生にとって、「地域」を前面に打ち出して現実感が伴うのか。それよりも学生の将来にとつての経験を重視すべき。

小中の学校では施設の利用がかなり許されるが、大学はほとんどダメ。

フレンドシップ事業や教育相談は余り知られていない。

顔が見えない！

思ったよりも遠いぞ 滋賀大

このような意見を聞くと、「地域」と「大学」をどの部分でつないでいくのかがポイントですが、滋賀大が物理的に小高い丘の上にあるように、あらゆる意味で高所にあつて、地域から浮いていると言えそうです。

地域からすれば、滋賀大も地元にあるいくつかの大学の一つに過ぎず、特別なものではありません。教員養成自体が以前のようにはっきりとした目標にならなくなっているし、交通が便利になつた今、教員養成系大学も近畿地区全体で選択されるようになっていきます。

ソフトとハードの両面で大学が地域の資源となり、地域に根ざさない限り、大学は地域に大事にしてもらえないのではないのでしょうか。

それではこれから大学として具体的にどうすればいいのでしょうか。座談会の中で出た意見をあげ



- (1) 地元の祭りやイベントへの参加。情報を学生自治会等へ流す。例えば江州音頭・神輿の担ぎ手。
- (2) 子ども対象の公民館活動（第二・四土曜）の学生によるサポート。
- (3) 学生が対応するケースワーク的な教育相談。

- (4) 諸団体に、学園祭等への出店依頼。また、親子や学校園児の招待。
- (5) フレンドシップ事業の参加者・淡海生涯カレッジ修了者へのアフターケアとネットワーク作り。
- (6) 地元の有識者を招いての「地域学」講座プロデュース。（受講生を学生だけでなく、一般にも募る）
- (7) 広報誌を地元の自治会にも配布し、大学の情報を提供。
- (8) 公開講座のシステムの見直し。（受講料を安く、サテライト会場を、等）

このように、座談会に参加していただいた皆さんから、厳しくもあたたかく、建設的なご意見をたくさんいただきました。今後も研究会でこういった座談会を企画し、これからの大学のあり方を考えていきたいと思っています。その際に地域との関係はこれまでよりもっと深く考えなくてはいけないと思います。

私達 VOICE (Voluntary Organization for International Communication & Exchange) は、彦根市とその周辺地域に住む外国人の人達との相互理解・交流を目的として、一九八九年十二月に誕生した草の根のボランティアグループです。

活動は手探りで始まりました。米原の文化産業交流会館で開校されたミシガン大学連合日本センターの先生の家族の方々の料理教室が始まりましたが、その一方で、滋賀大学に來ている留学生の人達とも交流したいと思いました。知人からの紹介で大学の先生に声をかけていただき、一九九〇年の二月頃、留学生会会長の中国人の方と会いました。その人は、「留学生は日本人との交流もなく、さびしい思いをして、日本が嫌いになって帰って行く人も多い」と話し、私達が進めようとしている交流にも、懐疑的な様子でした。国際交流というと、すぐ英語、アメリカ人とちやほやする傍らで、冷遇されているアジア系の留学生の苦い気持ちを感じ、せっかく日本に來てくれないながら、日本が嫌いになって帰って行くというのは、何と残念なことだろうと、胸が痛みました。



留学生の歓迎会で、日本文化紹介で、
琴を体験する留学生

滋賀大留学生との交流が始まったのは、四月に曾根沼公園でピクニックをしたときにやって來てくれたマレーシアの学生達のお陰です。私達のほとんどにとつて、初めて出会うマレーシア人で、しかもその日はラマダンの最中で、断食という習慣を持つ人達がいることも初めて知りました。この中のズハイミさんが会長になり、積極的にVOICEMと留学生会を結んでくれました。七月には留学生会主催のバーベキューが松原湖畔で行われました。(去年の夏、奥さんと子どもさんを連れて日本に來たスハイミさんは、バーベキューを始めたのが自分だということ、誇りにしていました!)。九月には学内で、

留学生と地域の交流

ひこね国際交流会 VOICE

VOICEMが初めて歓迎会とバザーを行い、土曜日の日本語教室にも留学生が何人も來るようになりました。

その時始まったことが今もずっと続いています。たくさんのお留学生達との出会いがありました。スピーチ大会やランチタイム(月一度の留学生相談室での昼食会)や送別会、イチゴ狩りやスキー教室さらには家族を含めた日常的な交流の数々。不十分ではありますが、留学生達の日本での生活が少しでも潤いのあるものになり、暖かい思い出を持って帰国してくれば、これに勝る喜びはありません。

十二年前と比べ、留学生の数も三倍ほどになりました。国際交流会館もできて受け入れは大分改善されたことと思います。以前は、アパート探しに、人種的偏見もあって苦労していましたが、今はどうで

しょうか。

留学生は国の宝だと思います。同世代の若者との交流が広がり、日本における国際交流に留学生が積極的に関わっていただけるように、まだまだ私達のしなければならぬことは多いと思います。

VOICE代表 小澤 祥子



滋賀大留学生と、松原湖畔でバーベキュー

教育学部

教育学部教育改革推進委員会では、教育改革と授業改善のためにさまざまな調査・提案・事業を行っているが、ここでは平成十二(二〇〇〇)年度秋学期末に実施した「学生による授業評価調査」の結果の一部を報告する。今回は、教育学部で開講された授業科目のうち、共通性の高い「学芸科目(十三科目)」、「外国語科目(十五科目)」、「共通教職科目(十一科目)」、「総合学習科目(一科目)」の計四十科目についてそれぞれ調査を行った。授業内容や学生の受講状況などについての質問表を配布し、延べ人数で二、一三六名の学生から回答を得た。得られた



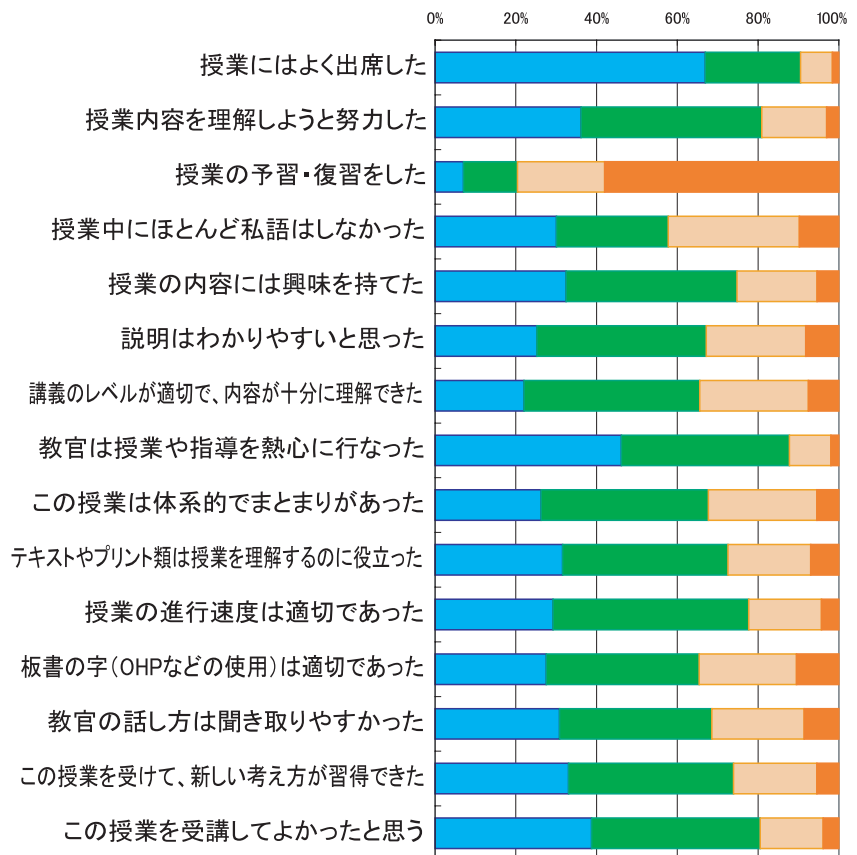
結果の中から、全授業科目の平均評価を棒グラフで示す。

調査結果をみると、学生の授業への出席率は高く、熱心に受講している学生が多いが、予習・復習は十分でないことがわかる。学生からみた授業評価として、多くの授業科目で教官は興味を持って授業を行うためにさまざまな工夫をし、また熱心に授業を行っているという結果が得られた。学芸科目や一部の外国語科目などの選択科目では、受講生の多い科目で満足度が低い傾向にある。また、現実的な課題を扱う科目に比べて理論を系統的に扱う科目は難しいと感じているようである。

自由記述からは、「授業のペースが早すぎる」、「教官の声が小さい」、「板書が汚い」、「教室が騒がしい」、「学生の理解度を十分に認識していない」などの改善点が指摘され、教育学部の学生の目はかなり厳しいと言える。大学

学生による授業評価調査結果(全科目平均)

■ そう思う
■ どちらかといえば、そう思う
■ どちらかといえば、そうは思わない
■ 全くそうは思わない



教育は、意欲ある者を成長させる教育内容の質が重要と、多くの教官は考えているようだが、学生は教授法に対してても教育者としての理想像を求めているように思われる。

各授業担当教官には調査結果の詳細を通知し、今後の授業改善の参考にしてもらうことにした。本年度は、質問項目や調査実施方法についてさらに検討しながら、もう少し対象科目を広げてできるだけ多くの科目について調査を実施したいと考えている。

教育学部教育改革推進委員会

委員長 丹羽 雅彦

副委員長 遠藤 修一

経済学部

経済学部では、二〇〇一年一月に「卒業生より見た滋賀大学経済学部の教育内容・方法に関するアンケート」と題する調査を行った。この中で滋賀大学および経済学部はどのような方向に行くべきかを尋ねた所、様々な意見が寄せられた。

アンケートによると、大学生の学力低下が叫ばれる中で、経済学部の卒業生の間にも、かつての滋賀大学の学力水準と比較して現状のそれが低下したという認識があるようだ。これに対しては、学部規模の拡大について「量より質を重視すべきである」とか、「単位取得や卒業を難しくすること」、「入試科目に必ず数学を加えること」などを求める意見がみられた。また、質の低下に関連して、教官の質の低下や教育方法の改善を求める声もある。

滋賀大学の将来については、変革期を乗り切る為に、特色を明確にせよという意見が強くあった。しかしながら、その方向性は一概ではなかった。彦根高商以来の伝統を踏まえてか、「社会に出て、即戦力となる講義をしてほしい」という実践性を求める声がある一方、「すぐに役に立つ」、「すぐにダメになる」をおそれている」という意見や、「社会状況に左右されない厳

格な教育の維持」を求める意見があった。専門性が教養性かという点についても意見が分かれる。「経済のプロを目指す高い専門家教育を実践してほしい」、「専門学校のような資格を身につけられるような授業があれば良いと思う」といった専門性の追求に重きを置くものに対し、「企業戦士の大量生産は終わった」、「スペシャリストになるのは就職後でよい」、「専門分野の学習も必要ですが、社会で必要な常識と教養を身につけてほしい」といった人格形成をふくめ幅広い教養を身につけることを重視する意見もある。

以上の議論は多かれ少なかれ、他の大学にも当てはまるが、滋賀大学に固有の論点としては、まず教育学部と経済学部が離れていることに関係したものが多くあった。「経済、教育との完全な統合と総合大学化」を求める意見がいくつか寄せられた。工学部や法学部をつくることを提案するものもあった。

しかしその一方で、「彦根高商時の精神に戻り」、「特色ある単科大学にすべき」との意見もあった。経済学部にあつてはこの「彦根高商」というのがキーワードになっているが、中には「過去の高商時代のしがらみにとらわれないこと。大胆な発想ができない大学は必ず将来消えてなくなると思う」という厳しい意見もあった。

経済学部ファカルティ・デイベロップメント委員会
前委員長 鈴木正仁
広報委員会委員 中野 桂

卒業生より見た滋賀大学経済学部の教育内容・方法に関するアンケート結果（抜粋）

「就職後に大学での授業が人格形成や教養として役に立ったことがありましたか、また専門知識や技術として役に立ったことがありましたか」という質問に対して、「あった」とする回答が「少しあった」とするものも含めて、それぞれ69.9%と64.9%あった。専門知識や技術より、人格形成・教養に役だったとする回答が5%ほど高かった。

	人格形成 / 教養 (%)	専門知識 / 技術 (%)
よくあった	16.1	16.0
少しあった	53.8	48.9
ほとんどなかった	28.0	30.9
全然なかった	2.2	4.3

「今後の大学の授業では、人格形成・教養重視の科目と専門・技術重視の科目のどちらに重点を置くべきだとお考えですか」という質問では、「ともに重視すべき」が一番多く、次いで「どちらかといえば専門・技術重視の科目のほうだ」、「どちらかといえば人格形成・教養重視の科目のほうだ」と続く。

	(%)
どちらかといえば人格形成・教養重視の科目のほうだ	23.0
どちらかといえば専門・技術重視の科目のほうだ	36.8
どちらも重視すべき	39.1
どちらともいえない	0.0
その他	1.1

大学探検として、今回は大学の近くを歩いてもらいました。大学の周りには誰も知っているところ、「そんなところがあったのか」というところまでまです。この記事を読んでもらうてぜひとも一度訪れてみてください。

滋賀大学の学生を一番よく知っているのは、学校の近所にある食堂の店長だったりするのかもしれない。国際交流会館の隣にある「カレーのKouge（こうげ）」のマスター、高下さんのお話を聞いてそう思った。Kougeは今年で開店二十周年を迎えた喫茶食堂で、カレーを中心に定食・スパゲティ・ラーメンなど幅広いメニューを展開している。

店のドアを開けると、学生が数人食事をしていた。客の殆どが滋賀大生。「毎日のように来てくれる人もいま



すよ。サラリーマンになった今でも来てくれる人は多いし、結婚してから家族と一緒にという人もいますね。」とマスターは言った。

高下さんは二十三歳でKougeをオープン。かっぶくのいい気さくなマスターだ。現在は奥様と二人で店を経営している。「昔は滋賀大周辺にも学生食堂がいくつもあったんです。今では残っている店は二、三軒ですね。」八十年代の初めの開店以来、学生のニーズに応えようと、開店時間やメニューや料理のボリューム、値段など

を思考錯誤してきた。最初は学生客が多かったので喫茶よりも食堂をメインにしてメニューを増やしたが、七、八年目、カレーだけの店にチェンジ。しかしその後不景気になって、また、コンビニができた打撃も大きかったため、メニューを再び増やし、半年前にはラーメンブームののってラーメンも始めた。学生の生活を間近でみてきたマスターの決断で、何代にもわたる滋賀大生とKougeのつながりは途絶えることがない。

それぞれのメニューにはマスターの物語がある。Kougeのカレーは欧風ビーフカレー。小麦粉が入って

経済学部の周辺を歩いて 学生とともに二十年——カレーのKouge

ぼつてりとしたカレーだ。欧風にこだわる理由は、と尋ねると顔がほころんだ。「前に（料理の）修行していたレストランの職人さんが、人間的にすごい人でね、その人の作ったビーフカレーがすごく美味しくて、それを食べた時の記憶が何十年も残っているんですよ。その後何軒かレストランで働きましたが、あんな人には出会ったことがない。忘れられなくて、カレーはその味を再現したくて。」カレーを作るたびにあのカレーの味を、店を、職人さんを思い出すのだ、と高

下さんは言った。私達が大学を卒業してから、大学生活を思い出すたびにKougeの味とマスターを思い出すのと、きつと同じように。

マスターのおすすめ、ハンバーグカレーと名物「火山スパ」をごちそうになった。カレーは牛骨と鶏でだしをとって三日かけて仕込むというだけあってコクがある。ハンバーグは中でチーズがとろけていておいしい。「火山スパ」は、一口食べると汗が噴き出してくる。辛さが想像を超えている。口の中が痛い。なみだ目の私達にマスターは「辛いでしょう？」と言ってにたりと笑った。この味を知らずしてKou



写真中央がマスターの高下さん

geの常連にはなれまい。

現在はラーメンがメニューに加わって仕込みに忙しいようだ。「どのメニューをやめようと思ってもそれぞれにお客さんがついていて、その人の顔が浮ぶんですよ。だからどれもやめられなくてね。」と苦笑した。

二十年というのは長いですが、とたずねると、「けっこうやってきたと思うよ。」と何度もうなずいていた。

山崎 スピカ（経済学部三回生）



教育学部の周辺には、行ってみる価値ありのスポットが結構ある。今回はその一つにあげられる千丈川に行ってみることにした。

瀬田川沿いを南郷方面に向かっていくと、瀬田川に流れ込む小さな川がいくつもある。その中ですこし大きな川が千丈川だ。瀬田川から入ったばかりのところは、まわりは全部住宅地だし、川沿いの堤防もコンクリートで固められて整備され、「本当にこの川にわたっているのだろうか？」と思わせるくらいだ。しかし、とりあえず上流に向かって歩くことができるようになるので、そのまま行けるまで歩いてみることにした。

国道からその道に入ると、川は千町の町中を縫うように流れていた。さら

に歩いていくと川沿いの道も狭くなり、民家が建ち並んでいるため所々通れない箇所もあった。同時に、上流に行くにつれ川の様子も変わってくる。たしかに整備はされているようだが、最近行われたものではないことが明らかだ。川の中には草が生い茂り、川底もはつきり見えない。「ここまで来ると、おっ！ここならいそうだな」という雰囲気になる。

さっきから「いったい何がいるというのだ」と言われそうなので、そろそろ明らかにしよう。ここ千丈川は、夏

とを忘れてはならない。ホタルは環境の指標であるといわれる。きれいな川でしか見ることができないので、今の川がどういう状態にあるのかを示してくれるのだ。千丈川でも、以前はホタルなど、とうの昔に死滅したと思われるのだ。ホタルが帰ってきたのは、住民の努力で千丈川がきれいになったからで、この川は、私たちが環境について学ぶ絶好の実践の場であるともいえる。

滋賀県下では、他にも守山市や山東町が地域全体でホタルに取り組んで

教育学部の周辺を歩いて

ホタルのすむ川——千丈川

の夕暮れになると、普段は見られないほどの人数でにぎわう場所へと変わるのだ。そこに集まる多くの人の目的は、「ホタル」を見るためなのだ。この付近で見られるホタルの種類は、主に「ゲンジボタル」ということでホタルの中でも最も見ごたえのあるものだ。暗闇で光を放ちながら多数のホタルがゆらゆらと飛んでいる光景には、ただただ見入ってしまうばかりである。私たちは実際、去年見たので、確信をもって勧めるのである。

この千丈川でホタルが見られるようになるには、川をきれいによつとという千町の人たちの努力があったこ

いるし、それ以外にもホタル「環境の町」というキャッチフレーズのとろがいくつかある。この千丈川のホタルもけっこう有名らしく、近所に住む人の話では週末を利用して遠くは神戸や大阪からも見に来る人がいるそうだ。

みなさんも、この夏ぜひ一夜、千丈川に足をはこんで幻想的な世界にひたってみてはいかがだろうか？しかし、自分のゴミはちゃんと持ち帰ってほしい。

(教育学部地理研究室 二回生一同)



明治の地図



平成8年(1996)測図

英語が得意で、語学力を身につけようと思ってこの研修に参加したわけではなく、ただ日本とは違った異文化に触れてみたい、この研修に参加したというのが正直なところ。なので私は日本を離れてオーストラリアに着くまでは、自分の英語力のおそまつさにも気が付かず、とてもルンルン気分でした。

ところが、いざホームステイ先での生活が始まると、何を言っているのかさっぱり聞き取れず、何回も「Pardon?」と聞き返してばかりいました。しかも、オーストラリアの人達が話す英語はとてもなまっついていて、知っている単語でさえ、『?』という状態でした。あまりの理解不能さに、最初はなにかにつけ「Yes!」と言って聞き流していました。すると、わけもわからず一緒に早朝ジョギングをすることになっていたり、夕食前に公園へとウォーキングに出かけることになっていたり、散々な日々を送ることになっていました。そんなことが他にも起こると大変だと思い、それ以後、かなり集中して話を聞くようになり、わからない単語が出てきても聞き流さず、ちゃんと質問するようになり、理解しようとする努力をしました。さすがにしばらくすると耳も慣れてきて、だいたい聞き取れるようになり、なんとかなるものだと実感しました。

聞き取れるようになるまで、好奇心も出てくるようにな



閉講式後の記念写真
(ディーキン大学ツーラックキャンパス本部玄関)

り、オーストラリアの文化にも触れる余裕を持てるようになりました。中でも私の興味を一番ひいたのは、オーストラリアならではの動物達でした。カンガルーやコアラ、ウォンバット、エミューなど、様々な動物に触れ、出会い、とても感動しました。動物の他に、

Australian Rules Football もとても興味深かったです。思わぬ出来事も多々ありましたが、その都度自分で解決する力を身につけることができたと思います。テレビや教科書で触れる異文化とは一味違った本物の異文化に触れることができ、とても満足しています。本当に良い体験をすることができました。

坪田邦江(教育学部三回生)

英語・英語・英語

オーストラリア留学から

今回の語学研修において非常に喜ばしかったこと、期待以上だったことは、優しさにあふれた現地の先生たちとの出会い、ホストファミリーとの出会いがあった。英語のできない私に優しくわかるまで問いかけ、私の乱雑な英語の表現にも懇々と耳を傾けてくれる

場面には非常に心を打たれた。とりあえず何かを話してみることだ。間違った表現があれば訂正してくれ正しい表現を教えてくれる。知らない表現、単語も覚えることができる。そして学習として一番よかったのはネイティブの人達の表現、または自分の持ってきた本に出ている表現を覚えてきたら、自ら使ってみることだ。これは不思議なこと、覚えたと思っただけの中に入れておくよりもいざ実際に使ってみると頭に本当によく残っているというのだ。事実三ヶ月経過した今も私は自分の現地で覚えて使った表現を覚えている。そしてこれから行く後輩達に言うておきたいことは必ず辞書を持っていくこと。現地の人たちは様々な言葉を使ってくるし、私達も時々忘れてしまう単語や表現もあると思う。そのために辞書は必要不可欠。しかし、部厚い辞書は重いしかさばるだけなので電子辞書がいいと思う。これならかさばらず手軽に持ち運びできるからだ。

この語学研修において私は今までにない大いなる宝物を見つけることができた。その宝物の一つは外国人に対して何ら違和感なく喋れるようになったということだ。日本にいた時は外国人と喋る時はかなり引いていたが、帰国してからというもの外国人と喋るのが当然のよう感覚になっている。非常に良いことだと思っ。英語はコミュニケーションの道具であり、その大切さということを本当に学べたと思うし、初めはちんぷんかんぷんだった外国人の会話も、最後の週には驚くほど理解している自分が出たことに不思議さと達成感を見出した。

何よりも現地の先生に「あなたは本当に英語がうまくなったね。」といわれたときは感慨無量だった。又素晴らしい一生涯の友人をこの研修で得られたということにもこの研修の特徴があると思う。

私から最後に一言言わせてもらえば、この研修は英語だけではなく、人間社会においてなくてはならないものを学べる場所であり、最高といっても過言ではないと思う。後輩諸君にはぜひこの研修に参加しこれを土台として、今後の素晴らしいライフを送ってほしいと思う。

辻 清仁(経済学部三回生)

昨年九月より英国バーミンガム大学 (The University of Birmingham) で在外研究に従事しております。バーミンガム大学は創立一九〇〇年、学生数二二、〇〇〇人(内学部学生一五、〇〇〇人)の大規模な大学です。私はここで「カオスコミュニケーションシステム」の統計的性質」ということについて研究しています。私の研究について、皆さんがたぶんお持ちの携帯電話を例に説明しましょう。携帯電話の仕組みをかなり大雑把に説明すると話者の話した音声データ(アナログデータ)をデジタルデータ(0と1の信号列)に変換し、それを電波に乗せて中継局まで運びます。中継局には相手から送られてきたデータもありますから、今度はそのデータを話者の携帯電話に運び、再び音声に変換して会話が成立するわけです。さてここで問題になるのが盗聴です。変換されたデジタルデータをそのまま送ったのでは、それを盗み見た人に会話の内容が筒抜けになってしまいます。ですから0、1信号列を何か他のでたらしめる数字の列(乱数列)のように見せる必要があるわけです。(この作業を暗号化といいます。)そのでたらしめる数字への見せ方にカオス列という、本当はひとつのルールに従って発生された数列にもかかわらず、でたらしめる数列を使うというのが今回の研究の柱となる部分です。ここで難しいのはあまりにも複雑な手段をとってしまうと通話の相手すら元の音声データに変換できなくなりますし、逆に簡単過ぎると暗号化の意味がありません。また信号には必ず雑音(ノイズ)が入ります。

これらのことを考慮しつつ、それではどのようなカオス列が統計的によい性質を持つのか、そのときどれくらい精度の向上が図れるのかということについて研究しています。

堅い話はこれくらいにしてバーミンガム市の紹介をしましょう。バーミンガム市はイギリス第二の都市で産業革命発祥の地として大英帝国の発展を支えた地でもあります。蒸気機関を発明したジェームズ・ワットもここバーミンガムの出身です。イングランドのほぼ中央に位置し、現在は流通の要として発展しています。少し北にはブラックカントリーと呼ばれる炭鉱地帯、また南に足を伸ばすとシェイクスピアが生まれ、そしてこの世を去ったストラトフォード・アポン・エイヴォンといった観光地もあります。地元の人たちは強烈な方言を持っている、はじめて聞いたときにはまったく聞き取れませんでした。(もちろんこちらのリスニング力の問題もあるでしょうが。)鼻に抜けるのが特徴で、また「ai」という発音が「i」になるので、例えば「I don't know」は鼻にかかった声で「オイドノウ」と聞こえます。サッカー好きの人は多いようで、日曜日になると街中の公園

これらのことを考慮しつつ、それではどのようなカオス列が統計的によい性質を持つのか、そのときどれくらい精度の向上が図れるのかということについて研究しています。

堅い話はこれくらいにしてバーミンガム市の紹介をしましょう。バーミンガム市はイギリス第二の都市で産業革命発祥の地として大英帝国の発展を支えた地でもあります。蒸気機関を発明したジェームズ・ワットもここバーミンガムの出身です。イングランドのほぼ中央に位置し、現在は流通の要として発展しています。少し北にはブラックカントリーと呼ばれる炭鉱地帯、また南に足を伸ばすとシェイクスピアが生まれ、そしてこの世を去ったストラトフォード・アポン・エイヴォンといった観光地もあります。地元の人たちは強烈な方言を持っている、はじめて聞いたときにはまったく聞き取れませんでした。(もちろんこちらのリスニング力の問題もあるでしょうが。)鼻に抜けるのが特徴で、また「ai」という発音が「i」になるので、例えば「I don't know」は鼻にかかった声で「オイドノウ」と聞こえます。サッカー好きの人は多いようで、日曜日になると街中の公園



大学にて

こちらの学生たちはおむね質素な生活をしています。ただ生活そのものを楽しむことは忘れておらず、天気の良い日にはキャンパス内の芝生の上でビール片手に日光浴を楽しんだりしています。学内のパブでビールを飲み、そのまま大学近

でサッカーの試合をよく見かけます。工業都市ですから街自体はお世辞にも「キレイ」とは言い難いのですが、大学はキャンパスの中心に大きな時計台を持つ美しい大学です。時計台からは毎時いかにもヨーロッパな鐘の音が響きます。またBarber Institute of Fine Artsという付属美術館もあり十三世紀から二十世紀初頭までの絵画が展示されています。一般の人たちにも無料で開放されていて、展示作品の中にはモネやルノアール、ゴッホといった大家の作品もあり、初めて入ったときにはおどろかされました。

市民へのキャンパス開放という点ではオープンキャンパスが一年を通じて設けられています。オープンキャンパスは大学説明会でもあるのですが、日本のように高校単位で生徒が来るのではなく、父母と見られる人たちが自分の子供を入れるところを調べにくるというたよつです。中には親子で来ているのかなと思われる人たちもいて、大学というものからえ方の違いが感じられます。

辺にたくさんあるBarber (Barberとはバーミンガム名物のカレーの総称です)で夕食をすませ、またパブへというのがこちらの学生の典型的なナイトライフのようです。試験期間中は目の色を変えて勉強しますが、試験が終われば繁華街へ繰り出します。EU内の留学生も大変多いのですが、ヨーロッパといっても英語を母国語としている国は英国とアイルランドしかありませんから、留学生に対する英語のサポートプログラムはしっかりしています。九月から三月までのあいだ、毎日昼の一時間にスピーキング、ライティング、ボキャブラリー、グラマーといった講義が開かれ、ここでは単に一般の英語を教えるだけではなく、アカデミックなライティングとは、いかに講師と会話を取るか、どうやって効果的に反論するかといった大学内での英語に的を絞った内容が含まれています。日本人留学生も多く、一〇〇名以上いるようです。また他にも日本の提携大学からの交換留学プログラムなどを使ってきた学生もいます。彼らの大半は一年間の留学で、その間に英語と自分の興味のある分野両方に関して学んで帰ってきます。中には日本人留学生同士でいつも固まっている人たちもいて、もったいない事をしているなと思うこともあるのですが、ほとんどの学生たちはこちらでしかできない経験を積み、そして外から日本という国を見つめなおす目を持って帰っていくようです。

大濱 巖(経済学部講師)

吹奏楽団

「大学生にもなって吹奏楽をやっている人は変わっている」と言われたことがあります。しかし、大学から楽器演奏を始めた初心者も大勢いますし、中学校くらいから続けている経験者もいます。誰にとっても音楽は楽しいものであり、やりがいのあるものなので、大学生になっても吹奏楽をやっているのだと思います。私達滋賀大学吹奏楽団もそんな個性あふれる団体です。一回生から四回生、院生の先輩方など、幅広いメンバーで音楽に対する熱い情熱をもって日々活動しています。

私達の楽団の活動で大きな柱となるものは、夏のコンクールと春の定期演奏会です。またその他にも地域との関連を深めていきたいと考えているので、私達は様々な場所へ依頼演奏に出かけます。昨年は龍谷大学の学祭へ招待されたり、近江今津での合唱コンクールでの演奏、びわ町での中学生との合同演奏など一年間を通じて県内のいろいろな所で演奏しています。依頼演奏を大切に思う気持ちには理由があります。例えば今津の演奏では、私達の琵琶湖周航歌の演奏に合わせて会場全体が大合唱となる場面がありました。このように心が一つに重なり合うという素晴らしい一時を過ごせることが依頼演奏の最大の魅力であると思います。また、秋の学園祭ではジャズバーを有志で開くという違った一面もあります。大人のムードあふれる新たな顔に会える場です。

このように私達は一年間で多くの演奏をします。少しでも多くの人に楽しんでもらうという気持ちを持って限られた時間の中で練習に励んでいます。春の定期演奏会が一年間の集大成であるので、多くの人に一度足を運んでもらえればうれしく思います。今後とも人との触れ合いを大切に活動していきたいと思っています。



ウィンドサーフィン部

私達ウィンドサーフィン部は、近年、全国的な強豪チームに変わりつつあります。今年の三月に行われたNT選考レース（学生ナショナルチームメンバー選考レース）においても、我が滋賀大学からは三回生の加藤君が見事NT入りを果たしました。他にも、全日本ボードセーリング選手権という、学生のみならず一般の方も参加する国内最高規模のレースにおいても四回生の葛山君が四位入賞を果たす等、輝かしい実績を残しています。日々の活動は、そんな輝かしい実績に負けず劣らず、活



気に満ちあふれています。上回生、下級生という年の境を越えて、皆ウィンドサーフィンというスポーツを楽しみ、何かしらの目標を持ち日々活動しているのです。

又、他大学との交流もあり、となりの県立大学と活動をもとにし、レース等では他の関西の大学を中心として、日本の大学生と仲良くなれます。

これからも、私達ウィンドサーフィン部は県立大学のウィンドサーフィン部とともに、これらの輝かしい実績を保ちつつ、初心を忘れずにウィンドサーフィンというスポーツを楽しんで行こうと思っています。

近江の散歩

大津市長等の三橋節子美術館

京阪電車石坂線を別所で降りて大津市歴史博物館 円満院 三井寺 琵琶湖疎水 三尾神社 長等神社 長等公園と続く道は私の好きな散策路の一つである。その長等公園の緑の中を上り詰めた琵琶湖を一望できる一角に三橋節子美術館があり、現在彼女の回顧展が開催されている（平成十二年九月、平成十三年七月）。

三橋さんは、昭和四十八年、ガン性腫瘍のため画家の命である右腕を手術で除去してから、二年後に三十五歳という若さで永眠するまでのわずかの間に、左手に絵筆を持ち替えて、たぐい稀な絵画を残された天逝の画家として知られる（梅原猛『湖の伝説 画家三橋節子の愛と死』）。

三橋さんの絵の前に久しぶりに立つて、改めて考えさせられたことは、人間が余命幾ばくもないという死の予感を眼前に見据えて、病苦を押しとどれだけのことができ、どのような潔い生き方、死に方ができるかということである。世には、三岸節子・片岡球子・秋野不矩・小倉遊亀といった、八〇歳・九〇歳を過ぎてからもなお幾多の苦難を乗り越え、湧き上がる創造のエネルギーを高い芸術作品に開花させていった、一連の傑出した女性画家達がいる。だが三橋さんにはそうした時間は与えられなかった。

しかし彼女は、残されたわずかの時間に、別れゆく最愛の家族・友人達へ

教育学部附属幼稚園、創立50周年記念式典を挙

式典には、加藤学長、川嶋副学長、歴代園長、旧教官、園児等約300名が出席し、主催者である附属学校園同窓会会長代行の宇野公夫氏の挨拶、加藤学長の祝辞、育宝会から園庭整備の目録贈呈があり、木川田附属幼稚園長が謝辞を述べた。

平成13年3月10日
(於：附属小学校多目的ホール)



ステージ発表として、附属中学校生徒によるプラスバンド演奏、数々のコンクールで入賞実績の豊富な附属学校園PTAコーラス部のコーラス、更に木川田園長の独唱と続き、コンサート会場と勘違いする程の豪華なステージ発表が行われた。



三橋節子展

筒井 正夫（経済学部教授）

の思いや近江という風土への愛といった彼女固有の情感を、近江に残るさまざまな伝説を絵画に蘇らせることよって、そこに秘められた「親子の愛」「夫婦の絆」「人間どうしの誠実な交わり」「人間と動植物の血の通った温かい関係」といった普遍的なテーマを探り出し、それを美しくも悲しく温かい芸術へと昇華させていったのである。

彼女が描いた親子や夫婦、様々な鳥達や山野草を見ると、死して二十五年が経とうとする今日においてもなお、いや、ますます自然破壊や人間関係崩壊の現実に苦悩する今日においていっそ、いよいよ切々としたメッセージとして立ち現れてくるのを禁じ得なかった。様々な心を痛める暗いニュースが続く昨今、三橋さんの絵を前に近江の国に培われた伝説を思い、人と人と自然のあるべき姿に思いを馳せるのも、価値ある時の過ごし方と思われた。

J・S・ミル著（早坂 忠訳）
『自由論』

井上達夫は論説「天皇制を問う視角」の中で、民主主義とリベリズムの関係について次のように書いています。理想的な人間社会における集合的意志決定のルールとしては民主主義が最適だが、この「民主的意志決定そのものの射程を限界づける政治哲学が、この社会の根本的な政治原理とされなければならぬ。この政治哲学はリベリズムである」（『現代の貧困』）。私は井上のこの本も薦めたいのだが、以下ではリベリズムについての古典的名著『自由論』を取り上げてみたい。

ミルは書いている。「法的刑罰という物理的力であれ、世論という道徳的強制であれ……文明社会の成員に対し、彼への意志に反して正当に権力を行使しうる唯一の目的は、他人に対する危害の防止である。」これに対して、個人は自己の行為について、それが自分以外の人の利害に関係しない限り社会に対して責任をとる必要はない。これが自由の「公理」である。

さてこの個人の自由の第一の構成要素は、思想と討論の自由である。個人の基本的権利についてのミルの説明は具体的で興味深い。私にとつてそれは社会的・道徳的・政治的認識のための認識論としてもおもしろい。第一に、ミルの考えはK・ポッターの表現を用いれば「可謬主義」であり、ある言説の真理性を保証するものは反対意見による「反証」に生き残ることである。反対意見を圧殺するのは「我々自身の無誤謬性を仮定することであ

私の薦める1冊の本

松嶋 敦茂（経済学部教授）

る」と。第二に彼は次のようにも言う。「沈黙させられた意見が、たとえ誤謬であるとしても、それは真理の一部を含んでいるかもしれないし、また実際含んでいることがごく普通である。そして、ある問題についての一般的なし支配的な意見も、真理の全体であることはめつたに、あるいは決してないのだから、残りの真理が補足される機会をもつのは、相反する意見の衝突によってだけである。」つまり我々が社会的領域で正しい認識を形成しつるのはただ自由な討論を通じてのみであることが強調されるのである。

思想の自由と同様、行動の自由も自己の危険と責任に基づいてなされる限り擁護されねばならない。ミルにとつて行動の自由は好き勝手に振る舞いいうることであるよりも「自立性」を意味している。自発的で多様な個性に基づいて行動することが幸福の最大の要素であり、社会の進歩の第一の条件である。しかし、社会の現状は平均化であり、没個性化である。それをもたらしたのは一つには経済、交通、教育の発展であるが、とりわけそれは「世論」の力が支配的となり、「習慣の専制」が支配的となつたことに求められる。

ミルにとつて自由の最大の抑圧者は旧観念としてのキリスト教道徳と新しい現実としての世論の専制であった。現代日本の自由の抑圧者は井上も指摘するように地域や職場に陋固として残存する共同体主義と集団主義であり、「世論」という名の大家操作である。一五〇年前に書かれた古典は現代日本に生きているのである。

地域福祉論

私の専攻は、地域福祉論です。なかでも地域社会における子ども達の発達保障と子育てに対する社会的支援施策の課題を探っています。かつて一九九七年に滋賀県内の障害児学校に通う子どもたちの放課後の生活実態についての調査研究に取り組みました。現在はその延長として、滋賀県における障害をもつ子どもと家族にとつての社会資源の実態把握、子育ての社会的支援とバリアフリーのまちづくりに向けた課題を探るために調査研究グループを組織しています。二年ぐらいをめどに一つの成果になるよう計画しています。

現在、ノーマライゼーションやバリアフリー、あるいはインテグレーション、インクルージョンといった普遍的な考え方が、障害者福祉や障害児教育の基本理念となつてきています。それは、特別な困難や課題に応じて、福祉施設や学校での専門的な援助・サービス、教育活動に加えて、地域社会や地域生活に焦点をあてた取り組みを課題としていきます。

障害児とその家族を問題視するのではなく、障害をもつことによる特別な困難に視点をあて、その困難を軽減し問題を解決することと同時に、「生活の質（QOL）」の向上を図ることが求められています。福祉施設や学校内だけでなくの実践では、障害児とその家族の「生活の質」の向上は図れず、地域社会における生活を視野に入れた地域福祉活

私の研究

黒田 学（教育学部助教授）

動・教育活動が重要となっています。例えば、障害をもつ子どもたちの放課後の生活を見たときに、友だちと過ごすのではなく家庭に閉じこもらざるを得ない（バリアフルな）状況があり、地域社会から隔絶されているとも言われるべき実態です。子どもたちにとつて、学校でもなく家庭でもない、「第三の居場所」としての地域社会がすつぱりと抜け落ちていきます。

現代の私たちの生活は、地域社会における人間関係が疎遠で、共同的な関係が持ちにくいことが地域社会からの隔絶の背景にあります。また、たとえば地域社会に学童保育や児童館があつても、障害をもつ子どもの場合には送迎や指導員の確保などの対応が不十分なために利用することは困難です。このような実態は、ノーマライゼーションといった理念から大きな隔たりがあるといわざるを得ません。障害をもつ子どもをはじめ、すべての子どもたちの発達が保障され、バリアフリーのまちづくりが進むように、国・自治体による施策の充実を求めつつ、地域社会における共同的で豊かな人間関係をつくり出していくことが必要です。

現在は以上のような研究課題を持ちながら、対象を日本だけでなく、アジア特にベトナムにも焦点をあて、「ベトナムにおける障害者福祉の制度化、展開過程に関する研究」（文部科学省科研費一〇〇一一一〇〇二年度）についても進めており、比較福祉研究を行っています。

広報誌『しがだい』読者アンケート

広報誌『しがだい』のご愛読ありがとうございます。創刊して1年半経ちました。この機会に大学広報誌としてより一層の充実を図るべく、編集の参考とさせていただくために、アンケートをお願いする次第です。ご協力お願いいたします。

つきましては、裏面アンケートにお答えいただき、10月31日までにFAX又はハガキで回答いただきますようよろしくお願いいたします。

滋賀大学広報委員会

FAX

裏面にご回答いただき、FAXしてください。

FAX先：0749-27-1174

郵便はがき

522 - 8790

彦根市馬場一丁目一号

滋賀大学企画広報室
行

料金受取人払

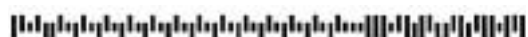
彦根局承認

104

差出有効期間
平成13年10月
31日まで

ハガキ

このハガキのみを切り離して投函してください。



広報誌『しがだい』読者アンケート

Q1. 「しがだい」を読まれていますか？

毎号読んでいる ときどき読んでいる 今回がはじめて

Q2. 「しがだい」の印象は？

読みやすい ふつう

読みにくい（理由： ）

Q3. 「しがだい」の掲載記事の量は？

多すぎる ちょうどいい 少ない

その他（ ）

Q4. 「しがだい」のレイアウトは？

良い ふつう

良くない（理由： ）

Q5. 今後も「しがだい」を読みたいと思われませんか？

思う 思わない どちらともいえない

Q6. 今号でよかった記事、つまらなかった記事を下の中から番号で選んでください。

（複数選択可）

よかった記事 （ ）

つまらなかった記事 （ ）

今号の掲載記事

滋賀大学のキャンパス 新学長就任 地域と大学(教育学部・経済学部の取り組み) 各センターの活動 地域からの提言(文化界・産業界から) 地域からの提言(地域から) 学生・卒業生による評価 大学探検 留学体験 在外研究報告 クラブ・サークル紹介 近江の散歩 教育学部附属幼稚園創立50周年記念式典 私の薦める1冊の本・私の研究 報道された主な記事

Q7. これまでの「しがだい」で印象に残った記事、または今後取り上げてほしいテーマ、記事あるいはご意見があればお書きください。

〔 〕

あなたは？

高等学校関係者 大学近隣住民の方
県内市町村関係者 報道関係者
他大学の方
滋賀大学関係者（名誉教授を含む）
その他（ ）

ご協力ありがとうございました。

滋賀大学広報委員会

しがだい (22)

広報誌『しがだい』読者アンケート回答

Q1.

Q2.

理由：〔 〕

Q3.

その他（ ）

Q4.

理由：〔 〕

Q5.

Q6. よかった記事

（ ）

つまらなかった記事

（ ）

Q7.〔 〕

あなたは？

高等学校関係者 大学近隣住民の方
県内市町村関係者 報道関係者
他大学の方
滋賀大学関係者（名誉教授を含む）
その他（ ）

報道された主な記事(二月～六月)

* 淡海のひと 市川智史助教(朝日(4.22))

* 学長選挙候補者発表 宮本憲一氏

三月

* 大学院経済学研究科にグローバル・ファイナンス専攻「設置」(朝日(3.1)他)

* 滋賀大学美術展開催(朝日(3.8)他)

* 国立大前期日程入試合格発表(中日(3.8)他)

* 滋賀大劇団「NERO」、県立大劇団と合同公演案内(朝日(3.9)他)

* 叙位叙勲(従五位勲五等双光旭日章) 田中高治元経済学部事務長(毎日(3.11))

* 県内国公立大入試の後期日程2次試験始まる(毎日(3.13)他)

* 教育学部入試で小論文に毎日新聞記事が取り上げられる(毎日(3.13))

* イチローの心、スポーツ心理学者が見た高校時代 豊田一成教授(毎日(3.21)23)

* 後期日程入試合格発表(京都3.22)他)

* 滋賀大卒業式(京都(3.27)他)

* PTAコンクールで「湖光」が優秀賞受賞 附属中 PTA広報部(毎日(3.29))

* 滋賀大入学式(京都(4.7)他)

* 教育学部入試で中日新聞社の記事採用(中日(4.10))

四月

* 滋賀大入学式(平13.4.1付け)(朝日(4.1)他)

* 研究室紹介 杉田陸海教授(中日(4.2))

* 滋賀大入学式(京都(4.7)他)

* 教育学部入試で中日新聞社の記事採用(中日(4.10))

* 滋賀大学公開講座の募集(滋賀彦根新聞(4.11))

* 滋賀大学公開講座(公開授業)の募集(京都(4.12))

* グローバル・ファイナンス専攻入学式(朝日(4.13))

* 鈴木紀雄と環境教育を考える会「環境学と環境教育」を出版(朝日(4.15))

* 公開講座「癒し系の栽培・園芸をしてみよう」受講生募集(産経(4.18))

* 広報誌「しがだい」(第7号)の図書館案内の記事を紹介 コラム「学生と新聞の関わり」(朝日(4.20))

(朝日(4.25)他)

* 滋賀大社会人の特別講義開講案内(株)CSKのIT戦略(滋賀彦根新聞(4.28))

* 叙位叙勲(勲三等旭日中綬賞)岡本 巖 名誉教授(京都(4.29))

五月

* 公開講座「目隠し彫刻」受講生募集(京都(5.8))

* 滋賀大「開学祭」開催案内(滋賀彦根新聞(5.9))

* 教員就職大幅増、教育学部二〇〇〇年度状況(京都(5.10))

* 新学長に宮本憲一氏(産経(5.12)他)

* 「琉球貿易図屏風」特別公開 附属史料館(読売(5.30)他)

* 企業経営革新フォーラム受講者募集 産業共同研究センター(京都(5.24)他)

* 経済学部の就職相談室長に民間企業の役員採用 能勢三興助教(産経(5.26)他)

* 県中学春季総体バスケットボール男子優勝 附属中学校(京都(5.27))

* 「琉球貿易図屏風」幕末に薩摩藩制作によるものと判明(読売(5.28)他)

* 省令化施設認定を記念して祝賀式典開かれる 産業共同研究センター(産経(5.31)他)

* ネットで経営相談「滋賀ベンチャーズ・インフラ」21産業共同研究センター(毎日(5.31)他)

六月

* 企業経営革新フォーラム「企業経営におけるリスクマネジメント」開催案内 産業共同研究センター(近江同盟新聞(6.5))

* 維持可能な都市・農村へ「都心の再生を住民参加で」宮本憲一氏(朝日(6.6))

* ミミズのスゴさを勉強「ミミズボランティア」をつくり活動 附属小5年生(京都(6.7))

* 訃報 中村義孝会計課長(読売(6.10)他)

* 大学院教育学研究科入試で現職教員に対する「特別選抜」導入(京都(6.12))

* 「学校の安全どう確保」関係者に聞く 石上三雄教育学部長(京都(6.14))

* 参院選立候補予定者3人を招き公開討論会を開くと発表 経済学部水新聞会(中日(6.14)他)

* 企業経営におけるリスクマネジメント(第2回)案内 産業共同研究センター(読売(6.14))

* 個展開催、油絵などを20点展示 山尾平名誉教授(中日(6.16))

* 公開ワークショップ「日本の組織を考える」開催案内 太田肇教授(読売(6.21)他)

* オープンキャンパス開催案内(京都(6.21))

* 企業経営におけるリスクマネジメント(第3回)案内 産業共同研究センター(読売(6.28))

* 参院選に向け公開討論会の質問決まる 経済学部水新聞会(毎日(6.30))



大長 滋賀大学学長 宮本憲一氏

行動的な経済学者 公害問題に積極的発言

滋賀大学学長に就任した宮本憲一氏は、環境問題や経済成長に関する見解を述べ、行動的な姿勢を示していることを伝えています。

滋賀大学学長に就任した宮本憲一氏は、環境問題や経済成長に関する見解を述べ、行動的な姿勢を示していることを伝えています。

産経新聞(平成13年5月12日)



編集発行：滋賀大学広報委員会

委員長 門脇 延行（副学長）
川嶋 宗継（副学長）
秋山 元秀（教育学部）
白石恵理子（教育学部）
黒石 晋（経済学部）
中野 桂（経済学部）
山崎 勝也（総務課）
宮本 俊明（学生生活課）
（印は本号のチーフ）

〒522-8522

彦根市馬場一丁目 1 - 1
（Tel：0749-27-1172）

発行日：平成13年 7月

E-mail：koho@biwako.shiga-u.ac.jp

ホームページ：http://www.shiga-u.ac.jp